

As seen by the other...: Perspectives on the self in the memories and emotional perceptions of Easterners and Westerners.

他人から見られているような...: 記憶と感情知覚における東洋人と西洋人の自己の視点

Cohen, D. and Gunz, A. (2002) As seen by the other...: Perspectives on the self in the memories and emotional perceptions of Easterners and Westerners. *Psychological Science*. 13(1), 55-59.

Rep. 小森めぐみ¹.

概要

- ・ この実験は東洋人と西洋人のもつ自己に関する視点のもたらす現象学的な帰結を検討している。アジア人は西洋人よりも自己を一般化された他者の視点で経験するという主張に一致する二つの知見が得られた。まず、自分がその場面の中心に居るような状況について思い出すとき、東洋人の参加者は西洋人の参加者と比較して、3人称 (⇔1人称) の記憶を思い出しやすかった。また、東洋人と西洋人は他者の感情の表現を読み取る時には異なる形式の投影に従事することがわかった。西洋人は東洋人よりも、自分の感情を他者に負わせるような、自己中心的な投影を生じやすかった。一方、東洋人は西洋人よりも、自分との関係で一般的な他者が感じそうな感情を投影する、関係的な投影を生じやすかった。現象学的な経験が東洋人と西洋人の自己や集団に付いてのイデオロギーのちがいを補強することについての議論が行われた。
- ・ 東洋のアジア文化と西洋文化は、自己や集団について異なる基本的な考え方をもっている (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; Triandis, 1995)
 - 西洋文化は自己を自立した、独立的な実体だと考え、東洋文化は自己を重要他者と基本的に相互関連し、関係をもっている実体だと考える。
- ・ 本研究ではこの自己イデオロギーの違いが異なる自己の現象学的視点に影響を与えることを示す

The presence of the generalized other in the west and east

- ・ もちろん西洋人でも相互依存し、関係を重視し、他者の影響を受ける (Choi & Nisbett, 1998)
- ・ Mead (1934) や Smith (1759/1984) は、(西洋人だけでも) 人が一般的他者または公平な観客の目をとおして自分を見つめることを指摘
- ・ このように、自己を他者の視点から眺めることは、自己や自己制御の発達に不可欠
- ・ しかし、東洋人については、この傾向はもっと強く見られる
 - 相互依存的なアジア文化では、逸脱を行動的・社会的に罰せるような “きつめの” 社会規範が明確かつ合意のうえで成立しているため、他人がみるように自分を見、用心が必要
 - Weber (1951) は儒教の教義は洗練すると、“高貴な” 人間は “身分にかかわらず、自分を内からも、周囲の世界からも見ることができる” と言っていると主張
 - Heine et al., (1999) は、日本人が “外的枠組み” をもって “観客への気づきを高め”、“主体でいることよりも、他人のイメージに沿うことを望む” と主張。
 - 他者の視点どりを行うことは、自分が望ましい行動をとっており、集団の基準に適合してることにつながる

¹ 一橋大学社会学研究科

- ・ つまり、アジア人のきつめの context では（個人主義的、ゆるめな個人主義的な context と比べて）、人は他者の視点をとりやすく、習慣的に一般的な他者を表彰し、“外から中を見つめる”傾向がある
- ・ 本研究では、二つの方法を使ってこの outsider の見方が心理プロセスに与える影響を検討。特に自己の異なる視点が東洋人と西洋人の記憶イメージと他者の感情経験の構築に与える影響を検討

Memory Imagery

- ・ Nigro and Neisser (1983) は、現場記憶（→一人称記憶）と観察者記憶（→三人称記憶）を区別
 - 現場記憶：もともとあった状況がそのまま見えて、自分で自分の事を見ることはできない。
 - 観察者記憶：人は傍観者、観察者としての位置から、状況を外のある地点から見ていて、自分を外側から見る事ができている。(see also Hebner & Fredrickson, 1999)
- ・ 東洋人が西洋人よりも outsider 視点をもちやすいのであれば、ある状況ではかれらの心的な想像は第三者視点をとって、記憶内の自己をみつめるかもしれない。
- ・ Heine et al., (1999)によれば、これはふさわしい行動を生み、個人として浮くことを防ぐ。
- ・ 東洋人は、人の注目を集めていたり、場面の中心にいる場合、第三者視点をとりやすいだろう
 - このような状況では、浮いてしまう危険があり、自分が集団の基準や他者の期待に添えているかに配慮する必要性が高まる
 - 自分が特に中心ではないような状況については、この傾向は見られない

Emotional Perception

- ・ 西洋人は対人知覚の歳に自己を他者知覚の係留とする。
 - 古典的な理論での投影は、自分の感じた感情が他者に投影される。他者が経験していると考えられる感情は、自分が感じているもの
- ・ しかし、自己中心的な投影はデフォルトではない
 - 東洋人が視点の転換を起こしやすい傾向をもつのであれば、自己中心的投影は少ないだろう
- ・ 東洋人が示すのは相補的または関係的投影。この場合、人は自分を見た、or 自分とかわりのある一般的な他者が自分を見たり、自分と何らかの関係をもつ際に感じるであろう感情を投影する
 - 例えば、自己中心的な投影の場合は、恥ずかしさを感じた人は、他人にも恥を投影するが、関係的投影の場合には、軽蔑を他者に投影する（恥じるということは、他者があなたを軽蔑のまなざしで見ていることを意味するから）
- ・ （現実でも想像上でも）社会的交換を行うときに、ある集団が特定の感情 X を抱いていることは、相手の集団が感情 Y を抱いている可能性を示唆する
- ・ 本研究は、相補的な感情ペア（恥/軽蔑、Gilbert & Andrews, 1998）、恐怖/怒り (Dimberg, & Ohman, 1983; Gilboa-Schechtman, Foa, & Amir, 1999; 悲しみと同情、Kitayama & Markus, 1999) を使用
- ・ どちらの種類も自己の感情を判断の基盤とするが、その使われ方は異なる
 - 自己中心的投影の場合：感情 X を経験した人は、他者も感情 X を経験していると投影
 - 関係的投影の場合：感情 X を経験した人は、他者は感情 Y を経験していると投影

- ・ 東洋人も西洋人も状況によって両方の投影に従事するが、西洋人のほうが自己中心的バイアスを強く示しやすく、東洋人の方が関係的投影を強く示しやすいと予測される
- ・ 本研究では、参加者に特定の感情（軽蔑、恥、恐怖、怒り、悲しみ、同情）を導出した後、さまざまな感情にあらわれる感情を読み取らせる
- ・ これによって、東洋人は他者に焦点をあてることで自己をより“outside-in”的に経験し、一方西洋人は自己をより”inside-out”的に経験することを示したい
 - 記憶に関しては、浮いてしまう危険性のある状況に付いては、東洋人は西洋人よりも3人称を使用しやすいだろう
 - 感情知覚に関しては、西洋人は自己中心的な投影を示し、東洋人は関係的投影を示すだろう

Method

- ・ 参加者：117名の北アメリカ生まれの白人学生（両親も北アメリカ出身）と78名のアジア生まれのアジア人学生（両親もアジア出身）
- ・ 全員が記憶の質問紙に回答し、そのうちの87名の白人学生と77名のアジア人学生がそれに加えて表情の読み取り課題も行った²
- ・ この実験における西洋人と東洋人は、ウォータールー大学の白人学生とアジア人学生

一人称と三人称の記憶

- ・ Nigro and Neisse(1983)に従った手続がとられた
- ・ 参加者は10の異なる状況を再生（Nigro & Neisser, 1983, study2より8場面、自分たちで考案したもの2場面-当惑を感じたとき、友人と会話した時）³
- ・ それぞれの場面について、どの程度昔のことだったか、記憶の鮮明さ、そこで感じた感情の強さ、ペイレンスを尋ねた
- ・ Nigro and Neisser(1983)を用いて3人称と1人称の記憶が説明され、自分の記憶がどちらだったかが11件法で尋ねられた。（1.完全に一人称の記憶だった～11.完全に三人称の記憶だった）
- ・ 思い出してもらった場面は2種類
 - 自分が場面の中心である場面：事故あるいは事故に遭いかけた場面、スキルのあることを子供や友人にみせている場面、恥ずかしがっている場面、友人と会話している場面
 - 自分が場面の中心ではない場面：ホラー映画を見ていた場面、テレビでニュースを見ている場面、健康のため走った場面、恐ろしい状況から歩いてまたは走って立ち去った場面、集団行動をとっている場面⁴

自己中心的・関係的投影

- ・ 記憶研究に引き続き、参加者は強い感情を感じたときを思い出し、それを記述した。
- ・ 記憶研究とのつじつまを合わせるために、記憶がどちらの視点で思い出されたか、記憶の鮮明さ、

² そのうち12名のアジア人学生は東南アジア出身だったため、文責からは除外した。記憶実験のみに参加した31名の学生をくわえても、実験の結果に変化はなかった

³ 自分が個人的な投影に従事していたときと他者の設定した基準に満たなかったときを思い出すよう求めることも行ったが、このプライムはほとんど影響をもたなかった

⁴ 他者の視点に同情的に入りやすいかも探索的に検討された。参加者は4つの集合的な記憶（家族化友だち集団に起きた重用な出来事で、自分はその中にはいなかった場面）を思い出すよう求められ、記憶の視点が尋ねられた。予想通り、東洋人は自分がその場面の主役になったかのように出来事を思い出して、同情的にその場面に入り込んでいた。しかし、この結果は性別の効果に限定されており、この傾向が見られたのは男性のみだった(p<0.02)

感情の強さを答えた。

- それぞれの参加者は恥、他者への軽蔑と不快感、怒り、恐怖、同情、悲しみのどれかをランダムに想起した。
- 最後に30枚の写真（アジア人男性、女性、白人男性、女性が moderate な量の恥、軽蔑、怒り、恐怖、同情、悲しみを浮かべている表情の写真+6枚の painting）を見せられ、それぞれの顔がどの程度6つの感情を抱いているかを評定した。

Results

1人称、3人称の記憶

- 文化と場面の交互作用が見られた ($F(1, 191)=17.55, p<.001$ (表1参照)
 - アジア人は自分が中心にいる場面を、そうでない場面よりも1人称で思い出しやすいかった ($t(76)=4.82, p<.001$)
 - 西洋人の視点は場面に左右されなかった ($t<1$)
 - 記憶の鮮明さ、感情、時間は結果に影響をあたえなかった
- 別の方向の分析では、東洋人は西洋人よりも自分が場面の中心にいるときに3人称の視点をういやすかった ($t(192)=3.18, p<.001$)
- 自分が場面の中心にいない場合には東洋人は西洋人よりも3人称を使いにくかった ($t(192)=2.76, p>.003$)
- 自己の吟味 (self-scrutiny) があまり必要でない場面では、東洋人は西洋人よりも調和し、自己意識を失いやすいのかもしれない (Weber, 1951)

自己中心的/関係的投影

- 投影得点：すべての写真評定の平均点が従属測度
 - 自己中心的投影得点：導出された感情と同じ種類の感情の投影得点
 - 関係的投影得点：導出された感情を経験している際に一般的他者が感じる感情の投影得点⁵
- 文化と投影タイプの交互作用が見られた ($p<.04$)
 - 西洋人は東洋人よりも自己中心的な投影を、東洋人は西洋人よりも関係的な投影を行った (表2参照)
 - 文化×投影タイプ×導出された感情の交互作用は有意ではなかった ($p<.74$) ため、感情の種類は考慮しなかった。
- 導出された感情別の検討でも、各条件のセルの ns (約14) は小さく、特定の感情はそれ以外よりも投影が生じやすかった
 - 恐怖以外の感情では、西洋人は東洋人よりも自己中心的投影を起こしやすく、東洋人は西洋人よりも関係的投影を起こしやすかった

Discussion

- 自分が注意を向けられるような場面では、東洋人は西洋人よりも3人称の視点をういやすかった。さらに、東洋人も西洋人も自分の感情を相手に転移させたが、その歪ませ方は文化に応じて異なっていた

⁵ それぞれの参加者の neutral score (当該感情以外の感情の平均点) は東洋人も西洋人も 2.71 だった

- 西洋人は自分と同じ感情を相手にも読み取っていた
- 東洋人は一般的他者が経験するであろう感情を相手に読み取っていた
- これらの結果は、記憶や感情知覚では、東洋人が outside-in 視点を持ち、西洋人が inside-out 視点を持つことを示している

- 感情知覚については、これらの投影のメカニズムは明らかではない。
 - 人々は特定の感情手がかりを拾いやすくなるのか
 - ムード導出プライムの記憶の視点が影響したのか
 - 関係的投影は特定の他者の視点の想像か、より抽象的な一般的他者の表象を想像したのか
 - 自己中心的投影では自分の経験している感情の availability を乗り越えることができないのか、それとも Piagetian タイプの投影（私が見ているものは、あなたが見ているもの）と同じものなのか
- 自己中心的は個人内現象であり、関係的投影は間主観的なものなのかもしれない
 - Karasawa (1995) は、日本では感情は特定の社会的状況と結び付けられていると考えられており、気分は状況の雰囲気（気）の共有（分）を示すと述べている

研究のインプリケーション：イデオロギーと現象学

- 本研究で見られた記憶と感情知覚の問題は、文化の content-process や micro-macro 問題に関係しているかもしれない
- 文化心理学の目標は、文化と個人の心が“お互いをつくりあげていく”方法を明らかにすること (Kitayama & Markus, 1999, p. 252)
- 最近の研究では (Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001)、文化的実践は、態度、信念、価値観の認知的内容を通じて補強されるのではなく、認知プロセスによっても補強されると主張
- 認知プロセス（本研究では現象学的経験）の考え方は、東洋人のイデオロギーモデルを支持
 - きつめの社会構造に組み込まれ、集団の前では“顔”を保たなくてはいけない (Reischauer & Jansen, 1995)（ここでの“顔”は特別な意味をもつ。なぜなら、他者の視点にたたなければ自分の顔は見えない）
 - これらの現象学的な経験は、自分がコミュニティの一員であるという考えを暖かく、サポートタイプな方法で補強する
 - 一般的他者が経験するであろう感情を他者に投影することや、outsider の視点の記憶をもつことは、自分がより大きな集団の context 内にあって、他者の目にさらされているという考えを補強することもできる
- 今後の実験研究では、自己の相互依存的/独立的側面の顕現性を操作したり、記憶の視点を操作した検討が必要。

Conclusion (略)